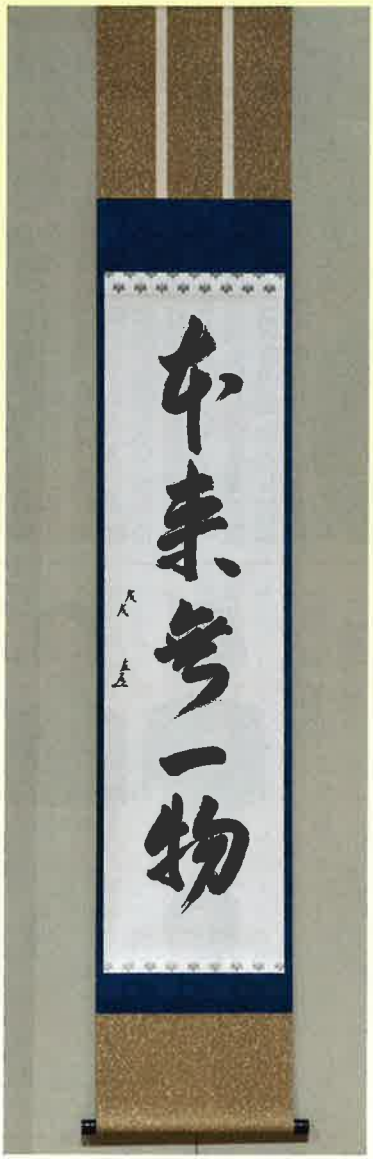
同門東京

第35号
令和8年3月19日発行
発行所
表千家同門会
東京支部
〒160-0022 新宿区新宿
3-37-11 安与ビル4階
電話(03)3356-3902番

猶有斎筆「本来無一物」



一文字　千家桐金襴
中廻し　若松丸紋

猶有斎宗匠におかれましては、平成三十年戊戌二月二十八日利休居士御命日に表千家十五代家元をご襲名なされ、令和二年二月より始められましたご襲名披露茶事を足掛け五年を経て昨春ご圓成なされました。

これを期して、お家元宗匠より、ご襲名の内祝いとして、五十七支部それぞれにご自筆一行書が寄贈されました。東京支部へは、お家元宗匠ご自筆「本来無一物」が令和七年五月の支部総会にて、本部講師渡辺潤宗匠より三井八郎右衛門支部長へ手渡されました。

早速、舞台上に設えた床に掛け、支部総会・一般講習会にお越しの会員様へ披露いたしました。

令和七年度 同門会東京支部総会・一般講習会 ―報告―

五月二十六日、東京国際フォーラムにて、支部総会・一般講習会が開催されました。本部から渡辺潤宗匠、髙橋克則先生をお迎えし、生形貴重様、三井八郎右衛門支部長、浦上博史副支部長のご臨席を賜りました。

一般講習会では、渡辺宗匠より「花所望」「長緒」、髙橋先生より「薄茶」のご指導をいただきました。

支部総会では、まずご来賓の紹介があり、続いて物故会員への黙祷が捧げられました。三井支部長よりご挨拶をいただいたあと、岡田事務長より会計報告、活動報告、会員数（一〇、六六〇名）などの支部年次報告がありました。また、支部としては、魅力ある行事活動に加え、学校茶道の強化や市民文化講座への取り組み、青年部活動への協力などの目標が掲げられ、会員の皆様へも会員数増加へのご協力のお願いもありました。

次に、数年にわたり執り行われたお家元ご襲名披露茶事が圓成され、ご襲名内祝いとしてご自筆一行書が同門会各支部へ贈られたことが報告されました。東京支部へは本総会にて、「本来無一物」のお軸と目録が渡辺宗匠より三井支部長に贈呈されました。

続いて京都での「毫寿お祝いの会」に出席されなかった方の代表として、朝野睦子様が表彰を受けられました。今年度は支部特別功労者表彰の該当者はなく、学校茶道教授として長年ご指導にあたられた佐藤文昭様、佐藤里子様、小田怜子様、早田祐子様、高島のり子様が支部功労者として表彰されました。式典の後、渡辺宗匠より「惺斎の話」のご講話をいただき、生形様より「利休と弟子衆」のご講演がありました。

ロビーでは宗匠のご講話に合わせて冊子『惺斎』が頒布されました。青年部のコーナーも設置され、活動の紹介と入会の案内がありました。

毫寿表彰

一般講習会

講習課目
「花所望」
「長緒」
「薄茶」

本部講師
渡辺潤宗匠
髙橋克則先生

長緒

薄茶

佐藤里子様

佐藤文昭様

朝野睦子様

高島のり子様

早田祐子様

小田怜子様

三井八郎右衛門支部長 ご挨拶 ～要旨～

同門会東京支部会員の皆様こんにちは。本日、本部より渡辺潤宗匠、髙橋克則先生、国文学者の生形貴重先生、副支部長の浦上博史様、そしてここにいらっしゃる多くの皆様におかれましては、ご多用中のところ東京支部総会へお越しくださいまして誠にありがとうございます。

前回こちらでご挨拶を申し上げたのがついこのあいだのようですが、あれから既に一年が過ぎました。この間、特に印象的だったのは夏の暑さもひとつです。ある方は、四季が五つになったと仰っています。「五季」といえば春夏秋冬の他に長雨もしくは梅雨を含めるように思えますが、それとは少し違う五つの季節だそうです。春と秋が一ヶ月ずつ短くなって、夏において初夏・盛夏の他に「猛暑」が加わったようです。夏が大変長くなってきております。皆様どうぞエアコンなどで適切に温度管理をなさり、水分を多めにとってご健康を維持くださいますようお願いいたします。

一方、世界では社会でも指導者の入れ替えなどがあり、混沌としてきております。このような不安定な折には、文化が我々の心の拠りどころとなります。何気ないひとつひとつの日ごろの動作そのものが私達の文化です。中でも特に長い間引き継がれているのが、茶道を含めた伝統文化です。これら伝統文化を守り、継承することは、我々のアイデンティティの維持にも繋がります。茶道に関わる多くの方々のご協力も必要です。そして何より、所作・習慣の習得は一度失われると取り戻すのに長年の時間がかかります。会員の皆様は、日ごろから表千家茶道

の鍛錬をされていることと存じます。皆様の飽くなき探究心には敬服します。引き続き次世代へと継承すべく、活動、発信、普及をして表千家茶道を盛り上げていただきたいと思います。このことをお願いしまして、ご挨拶に代えさせていただきます。この後、渡辺宗匠からの第十二代惺斎宗匠のご講話と、生形先生のご講演がございます。どうぞお楽しみくださいませ。ありがとうございました。

「惺斎の話」

渡辺潤宗匠

ご講話より

惺斎は碌々斎の息子として生まれ、明治大正昭和とお茶にとって大変厳しい時代に活動されました。表千家の茶道史にはいくつかの大きな危機があります。一つ目は、元伯宗旦から江岑の時代です。江岑は元伯宗旦の働きで紀州徳川家に出仕が叶い、表千家はお茶の家として続いていくことができました。二つ目が明治維新による表千家存続の危機および茶道人口の大幅な減少の時期です。この厳しい時期に、碌々斎は大変ご苦労されました。惺斎は碌々斎が隠居した明治二十五年三十代を継ぎます。碌々斎が亡くなるまで十八年間共に活動し、東京出張所の開設もでき、表千家は復活の兆しを引き寄せます。これは惺斎が歴代の家元の中で好み物が一番多いことによっても見ることができます。一方惺斎は明治三十九年一月二十五日家元からの出火で蔵と祖堂と大門を除く母屋を全焼させてしまいました。惺斎は非常に真面目で謹厳実直の方だと言われていますが、このことのためにひたすら忍耐するしかない非常につらい想いを生きていたのだと思われます。

惺斎の好み道具から、その背景が見えるものを二つ、持ってきました。一つは一閑宝尽蒔絵黒大棗。棗の甲の玉の絵は吸江斎好み玉の絵棗の写しです。この絵は吸江斎が紀州徳川治宝公に出仕をした折、大小の棗にせよと頂いたものです。これが棗の甲に銀で描いてあります。仏事を想わせる銀であるのに、周囲にはお目出度い宝尽くし。惺斎は多くの歴代の法要を行っており、年忌が当たらない利休も含めて、大正六年には歴代家元全部の法要をしています。しかしながら吸江斎の五十年忌に当たる年の一月に碌々斎が亡くなっており、吸江斎の法要はできませんでした。棗の箱にある大正九年はそれから十年後、吸江斎が亡くなってから六十年の年のものです。六十という数字は還暦の祝いの数でもあります。法要ができなかった吸江斎を想って、あえて仏事の銀の玉の絵で、六十の祝いの宝尽しの一閑の棗を作られた。惺斎の律儀さがわかります。

もう一つは紀州徳川十五代目徳川頼倫から南紀、根上がりの松を以て依頼された茶杓です。筒は真削り。真の茶杓など特別改まった時に使われ、竹の皮を全部取り除いて作られています。松の茶杓ですが、丁寧に筒を真削りし、「常盤」の銘の元である「常盤なる松の緑も春くれば、今ひとしおの色まさりけり」という源宗于の古今集の歌全部を書いています。ここに長く主家であった紀州徳川家に対する礼を見ることができます。

これらが惺斎の道具に対する想いなのです。表千家らしく、厳しい時代であっても、こういうものを残してくれた。私見ですが今、茶道人口の減少が深刻な第三の危機とも言える時代です。道具から見られる惺斎のこうした想いが、この混沌とした時代でも指針になるのではないでしょうか。こういう時代だからこそ原点に戻って道具を見て歴史を鑑み、作られた想いを酌み、我々の行く方向を確認する。東京には表千家ゆかりの美術館も複数あります。自分自身で調べ、考えて答えを見つける。そして本物の知識を身に付けてお茶に、人生に、生かす。簡単ではありませんが、それが大事なことであり、する価値のあるお茶の徳なのです。

一閑宝尽蒔絵黒大棗（箱蓋表裏）

茶杓「常盤」

「利休と戦国大名 ―利休と蒲生氏郷・高山右近の場合―」

生形貴重氏

ご講演より

本日は利休と弟子衆、中でも高山右近と蒲生氏郷に焦点を当て、師匠と弟子との間の心温まる話をしていきたいと思います。

千家で初めて紀州徳川家へ出仕をした逢源斎江岑宗左の『江岑夏書』（『逢源斎書』はその清書本）という茶書があります。利休の高弟を我々は

一、利休弟子衆七人衆と申は、
一番ニかもう飛騨守殿　1556～1595（39歳）
二ニ　高山右近、南坊之事　1553～1615（63歳）
三ニ　細川越中殿、三斎之事 1563～1645（82歳）
四ニ　芝山監物殿　生没年不詳
五ニ　瀬田かもん殿　生年不詳～1595
六ニ　牧村兵部大夫殿　1545～1593（48歳）
七ニ　古田織部殿　1543～1615（72歳）
此内、織部一茶之湯能無御座候、併後ニは惣和尚ニなり被申候、右七人はぶへん世ニ勝申候

逢源斎書（抜粋）
「江岑夏書」千宗左監修・
千宗員編『江岑宗左茶書』所収

よく「利休七哲」と呼びますが、これは江戸時代に出てきた言葉であり、元は「利休弟子衆七人衆」といって、この『江岑夏書』に記されたものでした。抜粋文（※図参照）に其々の生年と享年を書きましたが、平均年齢が約三十歳余りも下になるこの七人の弟子衆と、同じ目線で付き合う事のできたのが利休という人でした。

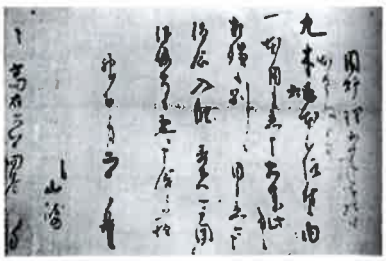
一方、利休の弟子衆は「ぶへん世ニ勝申候」とあるように、武芸・合戦に勝れた武将でした。下剋上の時代を戦いの中で生きたこの人たちは、利休の茶と出合う事で人間的にも成長し、立派な武将になりました。ある意味利休は優れた教育者であったし、またお茶の文化にはそのような「人を育てる力」があったのだとつくづく思います。秀吉の時代、「馬廻衆」と呼ばれる秀吉警護の重責を担う側近たちがいましたが、その多くは利休の弟子であったことが利休や秀吉の書簡から判明しています。つまり、利休の周囲には武人として力量の優れた人達がいたという事です。但し、利休が弟子衆と師弟関係を築いたのは、実は信長の時代でした。

本能寺の変で信長が倒れると、信長に臣従していた近畿の有力な武将たちが秀吉軍団に加わり、秀吉の新たな軍事力となりました。明智光秀との山崎合戦で活躍した高山右近（高槻城主）・中川清秀（茨木城主 右近の従兄弟）・池田恒興（伊丹城主）といった、いわゆる北摂の武将たちです。利休は、こういった勝れた武将たちの心を茶の湯の師として鷲掴みにしていました。それゆえに利休は、天下取りを目論む秀吉の側近中の側近となり、やがては秀吉の弟の秀長・細川幽斎とともに外交の要までをも担うに至ります。実際、秀吉政権内での利休の地位は我々の想像以上に高いものでした。秀吉政権の中心である聚楽第に、利休屋敷が政所や重臣の屋敷と並んで位置していることがその顕著な現れです。

聚楽第周辺の利休屋敷（※白枠内）

さて、台子の点前の簡素化・蟻腰中節の茶杓・棗濃茶・長次郎茶碗などの茶の湯改革をもたらした利休は、まさにマルチな才能の持ち主でした。そして政治力に長けるだけでなく、弟子衆の心を察し、彼等の身の上を真剣に考えてあげることもできる人でした。

たとえば、熱心なキリシタンの蒲生氏郷が秀吉から伊勢を拝領した際には、事前に伊勢神宮の神宮祭主藤波慶忠に手紙を書き、伊勢国で問題が起きないよう配慮しています。また高山右近には、待庵建築の折、右近が丸太を調達してくれた事への礼状が残っています。「利休のもとへ届けるよう秀吉公から仰せつけられた丸太六本のうち、一本が大変役に立ちました。他五本も役立つことでしょう。秀吉公にしかと伝えます。また、私が作ってあげた炉縁が届いた由、嬉しく思います」という親密な内容です。利休が直接手をいれた現存する唯一の茶室であるこの国宝待庵は、まさに丸太が特徴です。框や床柱の丸太は素材そのものの美を表現しています。実にこれらは高山右近による厳選の賜なのです。


利休から右近への書簡

蒲生氏郷と高山右近の二人は、茶の湯、そしてキリシタンという結びつきによる親友の間柄でした。天正十五年にキリシタン禁令が出ると、熱心な高山右近は棄教に応じず、明石の大名を辞しました。氏郷は心配して利休に熱心に相談をし、そのやりとりの狂歌が残っています。右近の将来を守るべく秀吉との面会の準備に密かに奔走したことがわかる、利休の陰徳が偲ばれる内容です。その結果右近は秀吉公認の上で加賀の前田家に引き取られ、利休はその下向を大変喜びました。右近が生涯の三分の二を金沢で過ごせたのは、弟子を思う利休の影の働きによるものでした。利休には、たとえリスクを取ってでも、弟子の面倒を見てあげる気遣いが身についていたのです。

最後に、少し感動的な話をして終わりたいと思います。冒頭の『江岑夏書』抜粋文でも示した通り、氏郷は三十九歳（数え年四十歳）で早逝します。その枕元に一か月も留まり、臨終の懺悔をさせたのが親友の高山右近でした。かくして病人は、再び洗礼のときと同様の信仰心に満つるに至りました。カトリックの教えでは、死ぬまでに懺悔をして心を純潔にしたら天国に招かれます。右近は最後の瞬間に友人氏郷を助け、彼によき死を得させました。右近は御絵（宗教画）を危篤の氏郷の前に置いて、棄教の赦しを請い主の御慈悲にすがるよう促しました。声が出ない氏郷に合図や眼差しで懺悔を告げさせると、氏郷はやがて目を御絵に向け、そして主の御手に永眠していった…これが蒲生氏郷の最期です。

二人は友情で繋がっていて、それを茶の湯で結び付けたのは師の利休でした。こうした人間作りをしたのは利休の力ですが、実は茶の湯自体の中にその力はあるのです。おいしいお茶を心を込めて点てることがどれだけ人と人とを結びつけるか。それを、我々も茶の湯を通して実感することができるのです。

今日は、利休のお茶、そして二人の戦国大名の繋がりの一端をご紹介し、お茶というのは深いものだなということを、少しでもわかっていただけたらと思ってお話をさせていただきました。ありがとうございました。

＊図・画像は全て講演資料より転載したものです

令和七年度東京支部垚寿表彰受賞者〈敬称略〉

稲葉律子　芦田博文　佐藤文昭　大沼一博
佛渕健悟　西室博史　塩畑章男　浅野光章
山根泰章　髙栁順一　吉田明秀　三島みな子
藤原ひろ子　クディラひとみ　池谷美佐子　林葉子
武田ヒロ子　岡田常美　佐藤美知子　前村治代
石井光子　佐々木芳子　中務雅子　羽石律子
多田悦子　池田こみち　宮本啓子　河端洋子
富岡洋子　山本清江　酒井晶子　能村悦子
山内敏子　三宅美恵子　浜田幸子　蟹江由美子
佐藤恵子　伊東洋子　栗本梅子　八木千歳
岡田静子　尾崎ヒロ子　清水美知代　小山京子
林悦子　寒河江よう子　志田恵子　岩田京子
市川孝子　北川康子　橋本知子　西岡まち子
木村恵子　髙橋久美子　小泉光子　柴田タツ美
榎並佐知子　蛸島延子　豊田美代子　植田寛子
髙橋麗子　浜田克江　大野瞳　横山佳江
冨田明子　片山陽子　松尾麗子　川口栁子
増井房子　横島和美　河野照子　野村ちえ
長谷川いそむ　北村文子　依田直実　髙橋みよ子
福島博子　山岸律子　板橋節子　佐々木彌生
鳥居澄志子　田久明美　鈴木京子　佐田千恵子
庄司由多子　百鬼ちづ子　浅野祐子　大和田初美
袖田由紀子　中川真理子　千田保子　後藤光子
鈴木純江　引地克子　関谷佐知子　関澤あき子
横山みね子　山科豊子　花村明子　大野茂登江
久保田真理子　長南みどり　白瀧佐久子　出元すずよ
櫻井優子　西順子　大塚恵子　鎌倉香津美
長谷川かほる　増田秀子　山田眞砂子　森田晴美
北原志津子　山本佳代子　生方とし子　平本光枝
飯田みゆき　髙橋節子　山上陽子　佐藤裕子
篠塚政子　伊藤とし子　鮎川妙子　川村博子
青木光江　角田芳子　田﨑富士子　新倉敏子
布施由美子　菅原八重　角田ちか子　阿比留秀子
舩山れい子　亀山ミヨ子　木村和子　亀山恵
髙部京子　大里富枝　宮崎雅子　長谷川和恵
髙橋萬里子　埜田容子　齋藤悦子　並木幸子
田村ひろ子　荒牧容子　坪井陽子　小諸圭子
多胡房子　峰村あさ子　朝野睦子　栗原喜美子
吉田悦子　髙橋利子　樋口達子　山本美保子
小林美千代　匂坂啓子　滝幸子　眞壁美枝子
菊池紀子　中村聖　椎名和子　松井三千世

以上の方々が受賞されました。

表千家同門会からのお知らせ

令和九年度「垚寿表彰」について

表千家同門会では、永年にわたり本会に在籍し、表千家茶道の発展に尽くしてこられた会員の功労を称え、垚寿をむかえられる方を対象に毎年「垚寿表彰」を行っております。

次の条件に該当される方は、ご自身で同門会本部にお申し出ください。

一、昭和二十六年のお生まれで、同門会に継続して二十年以上在籍（平成十九年以前に入会）の方は、京都にて執り行われる「垚寿お祝いの会」で表彰をうけることができます。
当日参加がかなわない方は、支部総会で表彰されます。

二、昭和二十五年以前のお生まれで、同門会に継続して二十年以上在籍（平成十九年以前に入会）の方は支部総会の席上で、垚寿の表彰を行います。

お申し出方法

ハガキに所属支部、会員番号、郵便番号、住所、氏名を明記のうえ、「垚寿表彰申請書希望」とし、『同門』誌七月号（予定）に広報が出ましたら、左記まで申請用紙を請求してください。
申請書は秋頃お送りいたします。

令和九年度「垚寿表彰」受付期限

令和八年十二月末日

この期日を過ぎてからの申請は受付いたしかねますのでご注意ください。
※令和八年度の申請は締切っております。

お問合せ先
表千家同門会　本部事務局「垚寿表彰」係
〒六〇二－〇〇七二
京都市上京区寺之内通堀川東入百々町五三六番地
電　話　〇七五－四三一－三二八一

東京支部行事案内

とりやめや延期など、変更になる場合があります
表千家ホームページ「茶の湯　こころと美」他の最新の情報にご注意ください

支部総会・一般講習会

●日程・場所　五月十九日(火)　東京国際フォーラム ホールA

一般講習会　受付 午前九時／開講 午前十時／終了 午前十一時四十五分の予定

●講習課目　「且座」「薄茶」

支部総会　開会 午後一時／終了 午後四時の予定

●講　話　本部講師　吉水忠雄宗匠「即中斎の話」

●講　演　奥村吉兵衛氏

※他支部での参加・受講は、受講希望支部の開催日の一ヶ月前までに東京支部へハガキにてお申し込みください。

※同封のご案内ハガキ部分を切り取り、ご記入の上、四月六日必着にてご返送ください。後日「指定席引換券ハガキ」をお送りいたします。

来場の際は「指定席引換券ハガキ」を必ずお持ちください。

入口で座席指定券と交換いたします。

会場案内

東京国際フォーラム
東京都千代田区丸の内三―五―一
電話 〇三―五二二一―九〇〇〇
山手線「有楽町」国際フォーラム口 徒歩二分
有楽町線「有楽町」出口A4―b 徒歩三分

東京美術倶楽部
東京都港区新橋六―十九―十五
電話 〇三―三四三一―〇一九一
山手線「新橋」「浜松町」徒歩一〇分
都営三田線「御成門」出口A4 徒歩二分
都営浅草線・大江戸線「大門」徒歩十二分
銀座線「新橋」徒歩一〇分

献茶式日程（東京方面）

●五月十四日(木)
神田神社（神田明神）（千代田区外神田）
中央線・総武線・丸ノ内線
「御茶ノ水」聖橋口 徒歩五分
千代田線「新御茶ノ水」聖橋口 徒歩五分

●六月十日(水)
山王日枝神社（千代田区永田町）
銀座線・南北線「溜池山王」出口7 徒歩三分

資格者講習会

●日時・場所　十一月十六日（月） 東京国際フォーラム ホールA
受付 午前十一時／開講 正午／終了 午後四時の予定

●講習課目　「初炭」「台飾」「廻花」
当日配布する資料の解説

●携 行 品　会員証・筆記用具

教授者講習会

●日時・場所　六月三十日（火） 東京国際フォーラム ホールC
受付 午前十一時／開講 正午／終了 午後四時の予定

●講習課目　教本「炉」
実技「炭所望」「濃茶」「薄茶」

●携 行 品　会員証・教授者講習会受講者証・教本・筆記用具

※教授者講習会、資格者講習会に該当の方には、不審菴より案内状をお送りいたします。他支部での受講は、受講希望支部の開催一ヶ月前までにハガキで不審菴へお申し出ください。教授者講習会につきまして、すでに五課目を修了されている「表千家教授」の方は、再受講いただけます。
なお、詳細につきましては、『同門』誌 二月号をご覧ください。

第三十回 支部茶会

●日程・場所　令和九年二月十三日（土）
令和九年二月十四日（日） } 東京美術倶楽部

※詳細は八月頃別途お知らせする予定です。

●十月八日（木）
乃木神社（港区赤坂）
千代田線「乃木坂」出口1 徒歩一分

●十月二十三日（金）
東京大神宮（千代田区富士見町）
中央線・総武線「飯田橋」西口 徒歩三分

右の献茶式の茶券は、家元にて扱っております。
会員番号を明記の上、郵便ハガキでお申込ください。
詳しくは『同門』誌の「行事のお知らせ」にて随時ご案内がなされます。
〒六〇二―〇〇六一
京都市上京区小川通寺之内上る
表千家内 献茶係
電話 〇七五―四三二―一一一一

その他

●十月二十五日（日）
銀茶会（銀座通り 一丁目～八丁目）
詳しくはホームページをご覧ください。
https://www.ginza.jp/

●十一月二十二日（日）
東京慈善茶会（護国寺）（文京区大塚）
護国寺にお問い合わせください。

第二十九回支部茶会 ―報告―

担当　東京支部参与
於　二階 花の間

濃茶席

寄付
掛物　蓬莱之図　松村景文画

本席
掛物　猶有斎筆一行　本来無一物　同箱書付
花入　置筒　銘千年翠　正玄作　而妙斎在判同箱書付
　黒丸香台掻合セシキテ
花　白玉　サンシュユ
脇床　鶴硯箱　時代
　料紙シキテ
香合　宗入作 赤丸　悝入極
　紙釜敷シキテ
釜　松竹梅地紋撫肩胴メ　銀ツマミ　浄心作　即中斎箱書付
炉縁　青海波ツホ〳〵蒔画　吉兵衛作　而妙斎在判同箱書付　即中斎在判同箱書付
雲砂子風炉先屏風　而妙斎在判同箱書付
棚　木地四方
水指　シカラキ耳付　銘苔清水　即中斎直書在判　同箱書付
茶入　古セト　銘富嶽　而妙斎箱書付
仕服　茶地唐草銀蘭
　紺地一重ツル牡丹純子
　石タヽミ宝盡シ間道
茶器　啐啄好　黒大棗　一閑作　住山楊甫箱書付
茶碗　覚々斎手造　黒　如心斎箱書付
　追銘金剛　即中斎箱書付
茶杓　吸江斎作共筒　銘萬歳　同箱書付
建水　唐銅エフコ　浄心作　即中斎箱書付
蓋置　覚入作　即中斎好ヲリヘ　同箱書付
菓子器　糸目　黒フチ高　宗哲作　即中斎箱書付
菓子　桃のかほり　とらや製
茶　楽寿の昔　柳桜園詰

二月十五日、十六日、東京美術倶楽部において表千家同門会東京支部茶会が開催されました。神谷支部名誉顧問ご夫妻、三井支部長、浦上副支部長ご夫妻のご参会を得まして、濃茶、薄茶、立礼の各席にてご一服差し上げました。ご参会できなかった方々に深くお詫び申し上げます。

濃茶席

花

茶碗

茶杓

立礼席

担当　東京支部
於　三階ホール

掛物　而妙斎 猶有斎合筆　而妙斎賛　千年翠
花入　青交趾　猶有斎画　松
花　バイモ　伊予水木　即全造　而妙斎箱書付
香合　萩雀　即中斎箱書付
釜　紹鷗小霰窠形　淨味作
而妙斎好扇形立礼卓　而妙斎在判
水指　即中斎好黄交趾　捻梅　即中斎在判同箱書付
茶器　惺斎好カマクラ雪吹　即中斎在判同箱書付
茶碗　萩 松自画 銘古今　而妙斎箱書付
替　仁清写梅椿図 銘百花開　即全造　而妙斎箱書付
茶杓　而妙斎作共筒 銘慶雲　同箱書付
建水　伝来袋形　淨益作　而妙斎箱書付
蓋置　竹節　即全造　即中斎箱書付
菓子器　青根来 輪花盆　即中斎在判同箱書付
菓子　春告鳥　南青山菊家製
　紅梅　若柳製

床

点前座

薄茶席

担当　東京支部
於　二階雪の間

掛物　即中斎筆 大横物　和敬清寂　同箱書付
花入　於神楽山　信楽写手付置　妙全造　而妙斎箱書付
丸香台シキテ
花　紅妙蓮寺　キフシ
香合　繪備前　寿老人　即中斎在判同箱書付
紙釜敷シキテ
釜　紫野写　與兵衛作
炉縁　桐蒔画　即中斎在判同箱書付
而妙斎好浅黄大高腰風炉先屏風　吉兵衛作　在判同箱書付
惺斎好好文棚　宗哲作　而妙斉宗員在判同箱書付
水指　マイセン末広　而妙斎在判同箱書付
茶器　松マキエ大棗　而妙斎在判同箱書付
茶碗　覚入作 赤 銘千歳　即中斎箱書付
替　扇面　即全造 即中斎箱書付
茶杓　即中斎作共筒 歌銘 白梅や…　同箱書付
平安二十本ノ内
建水　波彫唐銅　清右衛門作
蓋置　即中斎好ツクネ　即全造 而妙斎箱書付
菓子器　内笹マキエ　而妙斎在判同箱書付
菓子　春明　さゝま製
莨盆　松 手付　而妙斎在判同箱書付
火入　赤絵写
莨入　タトウ　吉兵衛作
煙管　如心斎好筋　浄益作

薄茶席

点前座

床

展観 三井家の茶道具 ―碌々斎―より

出品　三井記念美術館

明治天皇献茶会記　碌々斎筆　一幅

碌々斎がしたためた明治天皇献茶会記。明治維新後衰退した茶の湯の復興に向け、京都博覧会席上で三井家と表千家により明治天皇へ茶を献じた。数寄大名から近代数寄者が茶の湯の後ろ盾となった、それを象徴する歴史的出来事である。

明治天皇献茶会記

展観会場

日の丸茶碗　永楽和全造　二口

いずれも長石粒を多く含んだ荒い土で、口縁で一段わずかに絞った椀形の茶碗。明治天皇への献茶の節、天皇より使用した釜の銘を尋ねられ、「日の丸」とお答えしたことを記念して、碌々斎の好みで日の丸と称し三六五個の茶碗を和全に造らせた。

日の丸茶碗 「桜」

日の丸茶碗 「橘」

茶の湯の美

和歌色紙　後陽成天皇　一幅

桃山時代　縦22.9×横24.0cm　重要美術品　出光美術館蔵

《表具》幢褙

一文字・風帯　紺地花唐草文金襴

中廻し　茶地牡丹文金襴

上下　白茶地平絹

軸先　象牙

むらさきの
いろに
そま
る
かき
つはた
いけの
ぬなはの
はひかゝり
つゝ

後陽成天皇（一五七一～一六一七）の筆による和歌色紙です。後陽成天皇は、正親町天皇の子・誠仁親王の第一皇子で、和漢の古典に精通していました。書にも巧みで、漢字・仮名ともに秀逸な作品を多く遺しています。その書風は、鎌倉時代以降宮廷で流行した宸翰様を受け継いだものとされ、本作のゆったりと抑揚のある運筆で書かれた字姿は明るく澄んでおり、実に雅な印象を示しています。下絵には金銀泥で霞や水流が描かれ、その絶え間より杜若や水草などをのぞかせています。したためられる和歌の語「かきつばた」「ぬなは（ジュンサイの古称）」と下絵との関わりから、相互を意識して書いている様子がうかがえる逸品です。

茶の湯では「茶禅一味」の精神から墨跡が尊ばれますが、武野紹鷗（一五〇二～五五）は三条西実隆（一四五五～一五三七）に古典や和歌などを学び、藤原定家（一一六二～一二四一）の歌論『詠歌大概』によって茶の湯について悟ったことで定家の和歌観・美意識が茶の湯に反映されたと言われています。紹鷗が定家の「小倉色紙」を茶の湯に用いたことが和歌を床にかけた初例とされますが、それ以降、和歌（歌切）だけではなく定家の消息なども茶の湯の床を飾る様子が散見され、定家の筆跡自体が重んじられるようになりました。季節の和歌が揮毫された懐紙や色紙は掛物としても好まれるようになり、和歌の内容だけでなく種々にしたためられた書もめでられたことは想像に難くありません。

出光美術館はビルの建替にともない長期休館中です。
詳細は下記 URL をご参照下さい。
https://idemitsu-museum.or.jp/

【東京散歩26】

人がつなぐ茶室 ～その三～

神齢山悉地院大本山護國寺

東京には歴史的価値の高い茶室が多く残されている。前号に引き続き、建てられた当初から現在まで引き継いできた先人たちに想いを馳せながら巡ってみたいと思う。

行き過ぎた西洋化政策から国粋文化への見直しも始まった明治三十一年頃には、新しい茶の湯を愛好する近代数寄者達が現れてきていた。高橋義雄（以下箒庵）もその一人であり、益田鈍翁の次弟、克徳に茶の湯を師事していた。このような背景により護國寺における前号の名物石燈籠の寄進や松平治郷（以下不昧）の転墓、茶寮群の創建、そして茶道本山建立へとつながっていくのである。

境内左側には、いかにも由緒ある建築物「月光殿」が見える。箒庵が茶道本山に相応しい寺観を備えたいと考え、昭和三年、実業家原六郎の品川御殿山邸内の慶長館を移築した。元は、滋賀県の三井寺塔頭園城寺日光院の客殿だった。床内の張付蘭亭図は室町の狩野永徳の筆、襖絵（現在はアルカンシェール美術財団が所蔵）は全て狩野元信の筆と伝えられている。表座敷は十八畳二間、上段の床の間、襖一重を隔てた裏座敷は約十二畳二間で同じく上段に床の間があり、その他合わせて八十畳の大書院である。扁額は時の貫首小野方良行筆である。現在の室内は改修の際、古色を塗って古い印象を与えるところもある一方、建物下には免震装置が入っているなど最先端な面もある。

月光殿 床の間

移築完了後、翌年から月光殿を会場として弘法大師筆『崔子玉座右銘』を披露する大師会が昭和四十八年まで開催された。

月光殿大玄関横の「多宝塔」を過ぎ坂道を下る手前に一棟の茶室である「圓成庵と不昧軒」がある。松平不昧転墓記念に、第二の茶室として、広く庶民にも使いやすいように建築された。四畳中板入台目切下座床を圓成庵、十畳下座床を不昧軒とし、これに水屋、納戸、台所を包含する三十余坪の建物に腰掛、待合を附属した。数寄屋建築家仰木敬一郎（魯堂）による設計であった。また天徳寺にあった蹲踞石、出雲石の石燈籠も松平家より寄託された。圓成庵の命名は、同じく寄託された墓門に彫り付けられた円覚寺大用国師筆「弾指圓成」から取られた。世話方の実業家で日本のビール王と呼ばれた馬越恭平（化生）、実業家で益田鈍翁、松永耳庵とともに近代小田原三茶人と称された野崎廣太（幻庵）等と相談して、不昧公の茶徳を敬慕していた二十八人の茶道具商が井上侯爵家の道具入札の手数料を寄進し建築された。さすがは大正時代の道具商といえる。

不昧軒 蹲踞と石燈籠

圓成庵の西側隣の「宗澄庵」（三畳台目下座床）は月光殿移築後、道具商山澄力蔵により寄進された。

境内西方に「化生庵（三畳台目）及び月窓軒（八畳、次の間六畳）」がある。昭和十年、化生の孫馬越恭一が化生の遺構を寄進した。月窓軒床脇には琵琶台が設けられ、落ち着きの中にも華やかさのある書院作り、窓の向こうには大きな手水が据え置かれそこに満ちた水面に月が美しく映えたといわれている。

北方の「艸雷庵」は、昭和十一年に、薩摩出身で第四、六代総理大臣松方正義の五女、堀越宗円が蕾会創立十年記念として寄進した。艸雷庵は本席を四畳半台目、六畳を控え席、水屋台所を補足して月光殿縁側より廊下伝いに出入りできる。腰掛待合には岐阜出身の実業家、岡本太右衛門が艸雷鐘を寄進した。艸雷庵建物内の「箒庵堂」には箒庵像が安置されている。社寺様式と数寄屋の侘びが融合している。

昭和七年頃からは大寄せの茶会が次々と開催され、各流派が集まった。戦後の困難を乗り越え、現在に至るまで東京の茶道本山としての威厳を保っている。

箒庵堂 箒庵木像

元禄時代に創建され、明治、大正、昭和と近代数寄者によって引き継がれてきた建物や茶室に囲まれた境内は、都会の真ん中にあるとは思えない清々しい空気にあふれている。胸いっぱいに吸い込み、平和に茶道ができることの幸せに感謝しながら不老門をあとにした。

行事報告

明治神宮献茶式

十月三日、お家元宗匠のご奉仕による献茶式が行われました。明治神宮の献茶式は古く昭和二年六月に行われた記録があり、以後今日まで三千家持ち回りで秋の大祭に行われます。茶席は拝服席と、同門会担当の副席が設けられ、多くの方々にご参会をいただきました。

明治神宮献茶式

青年部より

東京都青年部は発会から今年で二十五年目を迎えます。

例年は、茶会や総会をはじめ、第一線でご活躍の先生方を講師にお迎えし、茶碗、出帛紗づくりなどの製作体験などを年間五回ほど開催しております。催しでの参加を通じて茶の湯に対する知識を深めつつ、それぞれの社中を超えた、同世代の仲間との交流を楽しんでいただいております。

今年度は、茶杓づくり、お菓子づくり、千葉県青年部と合同の青年部茶会などを開催いたしました。青年部世代で行う茶会は、もてなす側もお客様の経験も、大変貴重な機会と感じております。

令和八年度より、青年部は表千家同門会の中に位置付けられることとなりました。当青年部の名称も「表千家同門会 東京青年部」に変更となります。入会の条件などにつきまして、詳しくは表千家ホームページをご確認ください。なお、昨年八月より公式インスタグラムを始めました。活動の様子を掲載しております。ご興味のある方は、ぜひご覧ください。

同門会東京支部事務所内「青年部事務局」係

tokyo_seinenbu_domonkai@omotesenke.jp

電話　〇三－三三五六－三九〇二

公式インスタグラム　リンク
@omotesenke_tokyo_seinenbu

銀茶会
青年部担当学生創作茶席

支部からのお知らせ

住所・氏名変更の届出方法について

住所・氏名変更は、本部事務局へお届け下さい。

［お申し出・お問合せ先］

表千家事務局

電　話　〇七五―四三一―三二八三

ＦＡＸ　〇七五―四三一―三一五八

「稽古場登録」について

「表千家教授」または、「表千家講師」（四月より「表千家準教授」に移行）の方は、稽古場を登録することができます。稽古場を探している方を受け入れていただける先生は、不審菴事務局「稽古場案内係」までお申出ください。

稽古場案内

初めて茶道を習われる方や、学校卒業・転勤・転居等の事情により、やむを得ず今までの先生のもとでお稽古が出来なくなった方に、新たな稽古場が案内されています。

稽古場をお探しの方は不審菴事務所「稽古場案内係」までお申出ください。なお、ホームページでは、最寄りの稽古場を検索することができます。

不審菴事務局「稽古場案内」係

電　話　〇七五―四三一―三二八一

編集後記

客と亭主が心を一つにして一期一会のお茶を楽しむ、「本来無一物」はお茶をするものにとって、その根本のことばでしょうか。世界平和を願い、編集後記といたします。